

西夏語資料略解

——涼州感通塔碑の発見と造塔縁起

長田 夏樹

一 はじめに

老生が年わか少くして志した学問のテーマは、日本語の起源を究めることであつた。しかるに、この十数年は西夏学、それも主として西夏語関連の文献を見ながら日々を過ごしている。西夏は、十一世紀から十三世紀にかけて、中国の西北に栄えたチベット・ビルマ系タングート族の王国であつた。シルクロードの要衝をおさえて通商で富み、宋・遼ついで金と覇を争つた。

西夏研究は、実は日本学研究の一環としての意味を

もつ。というのも、日本は東アジア文化圏の辺境に位置しており、日本文化は、常に東アジア全体の視野から考察すべきだからである。日本が漢字をもとに仮名文字体系という日本語を表記する固有の文字を生み出したすぐあとに、遼は契丹文字を西夏は西夏文字を創り上げた。東アジア文化圏では、中華文明が周辺諸民族の文化変容をひきおこす。その変容に法則性があるとするれば、日本文化を考える上で、西夏や契丹を考察することは意義有ることだろう。つまり、日本文化生成の過程において、漢字漢語を如何にして自家葉籠中

のものとしたかを跡づけるには、西夏や契丹の文字構造が漢字のそれと如何に関わっているかを考察するに如くはない。また、中国の周辺諸民族が中華文明の光明に浴すると同時に、中華文明も周辺諸民族の文化を取り入れることによって中華たり得ていた事実も見逃すべきではない。

かくも西夏にとらわれたもう一つの理由は、老生が六十年の長きにわたる学生生活のスタートを切ったのが張家口カルガンにあった蒙古文化研究所だったことであろうか。北京の北西約一六〇kmにある張家口は遊牧民族圏の入り口にあった。河西回廊からオルドス平原を吹き揚げる黄砂を浴びながら、かつて栄えた契丹や西夏を身近に感じたものであった。モンゴル族の遊牧生活をリサーチするため、彼らとほぼ同じ日常生活をおくった。胡服を着て、羊肉を食べ、蒙古馬にうち跨り、夜の草原を照らす星々を見あげながら、ゲルで寝泊まりする生活。契丹族やタングート族もまた、同じ日々を過ごしたのである。言語と同様にそれを伝達する為の記号である文字にも興味があったので、

未解説の契丹文字と西夏文字は魅惑的であった。

地の果てのような張家口大境門外では、北京に出て

書舗（本屋）や菜館子（料理屋）を彷徨くことが最大の

楽しみであった。北京への往來の列車は、いつも大儀

そうに八達嶺の峻険を越えたが、その麓に居庸関があ

った。居庸関そのものは、明代のもののだが、その

そばに過街塔とよばれる元代に建てられたアーチ型の

門がある。この門に西夏文字が刻まれていて、その拓

本がヨーロッパに紹介された最初の西夏文字であった。

内容は仏頂尊勝陀羅尼および如來心陀羅尼などの經文

と造宮功德記である。元帝国にふさわしく、ランチャ

体デーヴァナーガリーによるサンスクリット、チベッ

ト文字、漢字、パスパ文字によるモンゴル語、西夏文字、

回鶻文字と六種の文字が使用されていた。このうち西

夏文字は未知の文字として、一八九四年ジュネーブで

開催された東洋学者會議に仏人エマヌエル・エドゥア

ール・シャヴァンヌ Emmanuel Edouard Chavannes

（漢字表記では沙畹、一八六五―一九一八）によって紹介さ

れている。翌九五年には、かのボナパルト家の王子

Prince Roland Bonaparte の名によって、これら六種文字による刻文は Documents de l'époque mongole des XIII^e et XIV^e siècles, Paris に図版として公刊された。もっとも、目に付きやすいこの碑文の研究はすでにおこなわれていて、この未知の文字は、英人アレクサンダー・ワイリー Alexander Wylie (一八一五―一八八七) が一八七〇年に女真小字と考察していた。これを西夏文字と正しく解釈したのは、仏人ガブリエル・ドヴェリア Gabriel Devéria (一八四四―一八九九) であった。ドヴェリアは、一八七九年に英国公使館の医官ステイブ・ブッシェル Stephen Bushell に居庸関西夏文字の拓本を示された。この未知の文字に多大な興味を抱いたドヴェリアは、長白麟慶の『鴻雪因縁図記』(一八八四)によって、女真小字が刻された「女真進士題名碑」の存在を知り、この文字がワイリーの主張した女真小字ではあり得ないと考えた。さらに、ドヴェリアはブッセルによって、南宋の洪遵著『泉志』に記載された西夏の古銭を示され、居庸関の未知の文字との類似性を指摘された。決定的だったのは、「涼州感通塔碑」の

銘文である。此の碑により、ヒゲの衣をまぶしたような未知の文字は、西夏文字と確定されたのである。

西夏文字資料については、ピョートル・クズミッチ・コズロフ Pëtr Kuznich Kozlov (一八六三―一九三五) が西夏の都市ハラ・ホトから発掘して、現在サンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館などに保管されている資料が一番有名であろう。量的にも質的にも際だって貴重な資料である。

しかしながら、この小論では、涼州感通塔碑や西夏の古銭を取り上げて、考察を試みよう。従来、このような西夏語資料は、古典文献を実証的に考究するための方法である考証学の範疇に属している。したがって、本稿では先人の論考を辿りながら卑見を述べていきたい。コズロフ資料やその後発見された資料を新しい学問で読み解くことはこれからの人が取り組むべき課題である。しかしながら、中国考証学の伝統を踏まえて銘文や經典について考察することは、老生のような旧世代の責務のように思われる。さらに、欧米に加えて中国の西夏文献資料研究にも目を配ってこそ真の西夏

学となりうるのではとの思いも強い。なによりも、清代に盛んとなった考証学を見直してほしいという願いもある。元代以後忘れられてしまった西夏文字を再発見した人物はだれなのか。それが、老生の目下の関心事である。この小考が、多少なりとも今後の西夏学発展に資すれば、幸いである。

ところで、西夏なる国家について、老生が最初に見聞したのは、旧制中学校の東洋史の授業であった。羽田亨監修の教科書『中等東洋史』には、右手に血の滴り落ちる生首を引つ提げた西夏女性の図が載っていた。この蠱惑的な図が、喜寿をすぎて西夏に惑溺することになった最大の理由なのかもしれない。願わくば、なお長生を重ね、妙法蓮華経や維摩詰所説経といった夏訳仏典や中国古典文献（孟子・十二国など）の西夏訳資料を論じてみようと思うのだが、如何せん、老齡八十六。続稿が完成するかどうかは、神のみぞ知りたもうであらう。

二 涼州感通塔碑について

漢の武帝は西域に版図を広げると、タリム盆地への回廊となる河西に四郡を置いた。東から涼州、甘州、肅州、沙州である。この地は、中華帝国が盛時をむかえれば富や文明の通り道として繁栄し、帝国が傾けば中華の富を求めて多種多様な民族が殺到する帝国の鬼門となった。文治に流れる宋帝国の弱体化に乗じて、タングート族の李元昊が西夏を建国したのは一〇三八年のことである。現在の寧夏回族自治区と河西回廊の属する甘肅省を中心とする領域が西夏王国の故地となる。涼州は西夏王国のほぼ中央に位置し、西夏の王都興慶府と西域を結ぶ交通の要衝であった。

現在、涼州は武威とよばれ、甘肅省武威県の県庁所在地である。この武威市にある武威県文化会館内に問題の「感通塔碑」は、全国重点文物保護単位として大切に保存されている。碑高二・五m幅〇・九mの碑には、陽面に楷書体の西夏文字が六十四字詰め二十八行にわたって彫られており、陰面には七十字詰め二十五行で漢文が刻まれている。碑陽の題額には、篆書体の西夏文字十四字が二行に刻され、その左右には綫刻の

優美な伎楽天が配してある。銘文から西夏第四代皇帝
崇宗乾順治下の天祐民安五（一〇九四）年に建立された
ものと知られる。

ところで、この「感通塔碑」は、下記の羅福成の論
文が出るまでは、「感応塔碑」としている場合が多かつ
た。本来、漢文篆額は「涼州重修／護国寺感／通塔碑
銘」と行四字三行であるが、流布した漢文篆額拓本面
は文字が欠落しており、文字復元の際誤って「感応塔
碑」となった。漢文篆額が「感通塔碑」であるから、
「感通塔碑」で正しいのだが、漢文銘の第二十四行に
「感通塔」と三度書かれてもいる。この碑の西夏文の訓
みについては、次の文献を参照した。

羅福成「重修護国寺感応塔碑銘」（『国立北平図書館
刊』四卷三号「西夏文專号」、一九三〇：一九三二出版）

Nikolaj Aleksandrovich Nevskij “Tangutskaja
Filologija” Moskva 1960

西田龍雄「西夏文涼州感応塔碑文解説」（『西夏語の研
究』上巻一九六四年六月）

陳炳応「重修護国寺感通塔碑（西夏碑）」（『文物』一九

七九年十二期）…『西夏文物研究』一九八五年

史金波「涼州感応塔碑西夏文校訳補正」（『西北史地』

一九八四年二期）…「涼州重修護国寺感応塔碑西夏文訳証」

Ruth W. Dunnell（漢名：鄧如萍）The Great State of

White and High. University of Hawaii Press, Honolulu, 1996.

ちなみに、羅福成（一八八五～一九六〇）は清朝最後の
考証学者として著名な羅振玉（一八六六～一九四〇）の子
息で、弟に当たる羅福長（一八九五～一九二二）とともに
西夏研究に鋭意努力した先学である。陳炳応氏は甘肅
博物館の文物考古研究者で、史金波氏は民族研究所の
民俗語文研究者である。

次に西夏文字篆書体の題額十四文字の訓みをあげた。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭

羅福成 白上国護寺涼州感応塔／之碑文

西田 ♪♪♪大土♪♪♪／♪♪♪

陳炳応 ♪♪♪♪境♪♪♪通没奴♪♪♪

ネフスキー ♪高♪♪円♪♪♪通／♪♪♪

長田 ♪♪♪♪圈♪♪♪♪浮図♪♪♪

つまり、西夏語は「白高国大圈涼州感通浮図之碑文」と訓む。白高国大圈とは白く高い大国の統治範圍を意味しており、即ち、大西夏国である。感通浮図の浮図はサンスクリットの buddha 塔なので、感通塔となる。

『全上古三代秦漢三國六朝文』の編集者である嚴可均（二七六二―一八四三）の『鉄橋漫稿』や『藏書紀事詩』七卷の著者葉昌熾（一八四九―一九一七）の光緒二十八年（二九〇一）の自序のある『語石』巻八「契丹西夏女真蒙古畏吾兒唐古忒書一則」条にも「感通塔碑」としている。

三 感通塔碑発見者・張澍

感通塔碑が発見されたのは、張澍（一七七六―一八四七）によると、清の嘉慶甲子九（一八〇四）年のこととされる。甘肅武威の人張澍はこの碑文の発見者である。張澍は『養素堂文集』のなかで、感通塔碑発見のいきさつを詳しく述べていた。しかしながら、張澍の主著の一つ『涼州府志備考』八巻は、張澍の死後長らく遺稿として上梓されないまま子孫の護るところとなつて

いた。したがって、上掲の別集『養素堂文集』を除いて、張澍の事績は長らく埋もれたままとなっていたが、一九六二年に、陝西省博物館が『涼州府志備考』八巻を入手し、文化大革命を契機とする紆余曲折を経て、張澍の死後、実に百三十六年後の一九八三年に出版されている。

ただ、この出版以前に、感通塔碑の漢文碑については、陸耀遹（一七七二―一八三六）の『金石統編』巻二十に標題を「重修感通塔碑」として載録されている。その一文の末尾に張澍と同年の進士吳榮光（一七七三―一八四三）の『筠清館金石記』に拠るとある。

張澍は、字は伯淪、号は介侯。張澍の事績としては、『三輔旧事』『三輔故事』を輯校し、同郷の詩人李益の『李尚書詩集』を上梓したことで知られる。嘉慶四（一七九九）年に進士となった。同年の第一甲には、『説文声系』の著者姚文田（一七五八―一八二七）と『經義述聞』『經伝釈詞』の著者王引之（一七六六―一八三四）がいる。衆知のごとく、科挙は三年ごと、干支でいうと丑・辰・未・戌の年に実施された。明清時代には、同じ年

に進士となつた者同士は、家族ぐるみ親戚同様の交友を生涯にわたつて行うという慣例があつた。

ところで、張澍の生卒年であるが、前掲の『涼州府志備考』には、異なつた二説が記されている。出版の年の一九八三年に陝西省博物館館長であつた武伯綸が記した同書巻頭にある『序言』では、張澍（二七八一―一八四七）とある。ところが、巻末に附された陝西省古籍整理弁公室の『跋』には、（二七七六―一八四七）となつてゐる。これは、武伯綸の拠つた資料と『跋』文著者の拠つた資料の相違によるものであらう。武伯綸の『序言』は、漢軍正藍旗の人趙爾巽（一八四四―一九二七）主編の『清史稿』卷四八六文苑三の張澍伝による。この張澍伝は、生卒年を含めて、重要な西夏文献資料発見者として正当な評価をされるべき張澍という人物の概略を知りうる一文なので、紹介してみたい。なお、以下の引用文の訓下し文、和訳文（露文和訳も含む）はすべて筆者による。

張澍、字は介侯、武威の人なり。父（名）は応挙、孝行有り。嘉慶四年、澍年十八にして進士と成る。是の

科（挙）、人を得ること最も盛んなり。澍（翰林院）庶吉士に選ばれ文詞博麗なり。散館（考試）をうけ知県に改められ、初めて（貴州の）玉屏に令ぜらるるも、病を以て帰（省）す。河を防ぐの（功）勞を叙せられ（四川の）屏山（知事）に選ばれ、興文（知事）を撰ね、父の艱に丁えり。再び起ちて（江西）永新を知す。臨江の通判を署（代行）し徴に坐して解緩せられ官を罷む。開復（原官に恢復）して（湖南の）瀘溪（知県）に補せられ、復た憂を以て去る。澍は性亢直にして至る所輒すれば声有てり。黔（貴州）に在りし時、巡撫の初彭齡県を過ぎる。澍はその僕（しもべ）の金を索むる者を杖つ。座主蔣攸銘は四川を（監）督して甬て車を下らしめ属吏の名を挙げてつみを劾くこと風采嚴峻なり。澍上書して其の情に循（上）い恩を市を論じ黜陟（免職と昇進）に当らざれば、此以て官は遂げずと。経史を博覧するを務め、皆纂著有り。遊跡天下を半し、詩文益富なり。心を閑隴の文献に留め、之を蒐輯刊刻せり。『五涼旧聞』『三古人苑』『統黔書』『秦音』『蜀典』を（編）纂せり。而して姓氏五書尤も絶字と為す。自ら詩文を著す外、又『詩小序翼』『説

文引経考証』有り。

ここでは、嘉慶四年（一七九九）に十八歳で進士となつたとあるから、生年は乾隆四十六年（一七八一）となるう。

では、『跋』の乾隆四一年（一七七六）生年説は、何に依拠するのか。これは西北師範大学中文系教授李鼎文「清史稿張澍伝箋証」（『甘肅師範大学学报』一九六四・一）の中に「生于乾隆四十一年、卒于道光二十七年」とあるのに拠つたのであろう。しかれば、張澍の生年は、乾隆四一年なのか、乾隆四十六年なのか。結論から言えば、李教授の乾隆四一年説の方が妥当と思われる。というのも、張澍が、十八歳で進士になつたとするのは正しくないからである。いったいに、明清時代に科擧の合格者に払つた世間の関心は、なみなみならぬものがあつた。進士に関する文献は枚挙にいとまがない。そのなかに、礼親王昭樞（一七七六―一八二九）の『嘯亭雜録』がある。この書の巻九に、「老年科目」「青年科目」に関する叙述がある。「老年科目」とは、五十歳

以上になつて科擧に合格したものの名簿であり、「青年科目」とは、二十歳以下で科擧に合格したものの名簿である。この「青年科目」の中に張澍の名は見えず、したがつて、張澍が十八歳で進士になつたというのは正しくない。また、錢泳（一七九五―一八四四）の『履園叢話』巻十三に載る「弱冠登第者」にも張澍の名は見られない。ただ、「青年科目」にも「弱冠登第者」にも十八歳で進士となつた朱珪の名が載っている。朱珪は、張澍が合格した嘉慶四年の科擧で試験官をしていたから、張澍と朱珪を混同した可能性が高い。

四 張澍の周辺——己未進士たち

仁宗嘉慶年間は、清朝の屋台骨が漸く傾きはじめて時代であつたが、人文科学の側面からいえば、文人学者が綺羅星のごとく輩出した黄金期であつた。朱珪が試験官となり、張澍ら優秀な人材の多かつた嘉慶四年の科擧を取り上げて、清代文人学者の動向を見ていきたい。西夏文献の研究をおこなつた文人は、多かれ少なかれ張澍と関係があるので、張澍の知友を検証する

ことは必要であらう。

清代科挙に関する文献の一つに、法式善の『清秘述聞』がある。著者法式善（二七五～一八一三）は、本名運昌、字は開文、号は時帆、蒙古正黄旗の人である。『清秘述聞』巻八の「嘉慶四年己未科会試」の条を参照しよう。

考官…吏部尚書朱珪、字は石君、順天大興の人、戊辰（乾隆十三年一七四八）進士。左都御史劉權之、字は徳輿、湖南長沙の人、庚辰（乾隆二十五年一七六〇）進士。戸部侍郎阮元、字は梁伯、江南儀徴の人、己酉（乾隆五十四年一七八九）進士。内閣學士文幹（本名は文寧）、字は蔚其、満州正紅旗の人、甲辰（乾隆四十九年一七八四）進士。

これを見ると、朱珪が正考官で、あとの三名が副考官となる。ところが、前掲書『清史稿』巻三四〇、朱珪伝には、ややニュアンスの異なる叙述がある。

嘉慶四年、会試を典^{つかさ}どり、阮元之を佐^{たす}く。一時の名流^{さく}搜^{ぬき}り抜^{ぬき}て殆ど尽せり。士林をして宗^{とつと}び仰^{あお}が為^{しむ}る者数十年なり。

また、同書巻三六〇の阮元伝にはこの叙述を裏付ける記載がある。

嘉慶四年、大学士朱珪と偕^{とも}に会試を典^{つかさ}どり、一時の樸学高才搜^{あみ}り羅^はりて殆ど尽きたり。

この記述からすれば、実質的には朱珪（二七三～一八〇六）が会試総裁で、阮元（二七六四～一八四九）が副総裁であった。

前掲の『清秘述聞』巻八の続きは以下のようになる。

状元は姚文田、字は秋農、浙江帰安の人。榜眼は蘇兆登、字は樸園、山東霑化の人。探花は王引之、字は伯申、江蘇高郵の人。

として、嘉慶四年進士の第一甲の三名を挙げて巻をおえている。

この三名を含めて、この年の進士の名簿を眺むれば、興味尽きざるものがある。我が愛読書『山海経』の箋疏者郝懿行の名もある。そういえば、『山海経箋疏』の序文は、阮元がものしていた。この序文に続く「審定校勘爵里姓氏」に列記された十八人の名も、なかなか興味深い。こころみに最初の十三名を列記してみよう。

儀徵阮雲台侍郎（阮元一七六四～一八四九）、陽湖孫伯淵觀察（孫星衍一七五三～一八一八）、武進臧西成文学（臧庸一七六七～一八一二）、埤安姚秋農中允（姚文田一七五八～一八二七）、高郵王曼卿学士（王引之一七六六～一八三四）、全椒吳山尊学士（吳鼐、歙県鮑覺生学士（鮑桂星一七六四～一八二六）、嘉応宋芷湾編修（宋湘一七五六～一八二六）、閩県陳梅修（恭甫）編修（陳寿祺一七七一～一八三四）、江西新城涂瀚壯侍郎（涂以軫）、商城程鶴樵（濟棠）侍郎（程国仁）、南海張棠村員外（張業南）、竜南徐香珏（字改

章黼）主事（徐名紱）

実に、このうち十名が、張澍と同じく「樸学高才」たる己未の進士であった。即ち、考官であった阮元、阮元が『経籍纂詁』の編修を託した孫星衍と臧庸の三名を除く十名である。このほかにも、「搜り羅りて殆ど尽き」たという表現がふさわしい己未進士の名を、前掲の続・再続を含めた『清秘述聞三種』（清代史料筆記叢刊本一九八二）より引用してみたい。その際には、張舜徽『清人文集別録』（一九六三）などを参照し、順番は進士題名碑（拠『明清進士題名碑録索引』一九八〇）の順とした。

湯金釗字敦甫、浙江肅山人（一七七二～一八五〇）張惠言字皋文、直隸武進人（一七六一～一八〇二）『周易虞氏義』九卷 吳榮光字伯榮号荷屋、広東南海人（一七七三～一八四三）『筠清館金石文字目』二卷 牛坤字次原、直隸天津人、『統詩雜詠』一卷 何南鈺字相文、広東博羅人『燕瀟雪跡集』六卷 陳寿祺字恭甫号左海、福建

閩県人（一七七一一八三四）『左海全集十種』；子喬樞程祖洛、字梓庭、安徽歙縣人『程簡敬公奏疏』八卷許宗彥字積卿、德清人（二七六八一一八一八）『鑑止水齋集』王廷紹字善述、順天大興人『澹香齋詩草』四卷錢枚字謝龕、浙江仁和人『齋心草堂集』莫与儔字猶人、貴州独山人（一七六七一一八四二）；子莫友芝有『韻學源流』毛式郇字伯雨、山東歷城人『竜吟館琴譜』二十卷宋其沅字湘帆、山西汾陽人『宋湘飄先生遺著』四卷歐陽厚均字福田、湖南安仁人『嶽麓文抄』十八卷李向榮字口口、漢軍鑲白旗人『浣愁草』一卷陳鐘麟字厚甫、江蘇元和人『紅樓夢八十齣』八卷郝懿行字恂九号蘭皋、山東棲霞人（二七五七一一八二五）倪模字預掄号迂存、安徽望江人（一七五〇一一八二五）『古今錢略』

かく並べてみても、何とも豪華な顔ぶれである。ちなみに、己未進士は第一甲三名、第二甲七十四名、第三甲百四十三名の合計二百二十名であった。なお、末尾の倪模については、西夏古銭の問題が絡むので、そ

の周辺を含めてみてゆきたい。倪模の著述『古今錢略』卷三十二の卷末に「師友題贈」という一文がある。まず、古銭収集家であった倪模が、古銭の拓本を作成して師友に贈った旨が記され、ついで、受け取った師友の返礼文が採録されている。

余、壬子（一七九二）自り都に在りて古銭を収め蓄え日久しくして漸く多く、今且そ十余年矣。篋の中に蔵る者も亦た間散りて失うもの有り。曾て其の概を摘て拓りし装じて冊頁と成す。一二相知の問題贈と為せり。抑或書を以て商う者有りて此の巻に録し、以て好みを契る感を志すと云う。

まず最初の題贈は、己未の考官阮芸台（阮元）のもの。

迂存進士蔵うる所の刀布貨泉甚だ富く翁（樹培）宜泉太史と与に相い補い益るに足れり。嘉慶四年仲夏十日。阮元譜研齋に于て観む。

倪模について知るには、『国朝漢學師承記』の著者江藩（一七六一―一八三〇）の題贈が最適。以下が江藩の題贈である。

海内古を好むの士にして古金を藏うる者（広東增城人）潘中翰有為・翁（樹培）部曹宜泉の家と（江德量侍御秋史と迂存先生の四つの家なる而已。秋史の藏うる所のは、已に散失して存する無し。先生は南に北に往来し、搜し羅て日に富なるも、之を潘翁両家に較れば之に過る有るも及ばざるは無きなり。

この「師友題贈」には、もちろん前掲した己未進士の名が見えるが、その他の己未進士の名もある。江西清江の人黄郁章・順天府宛平の人董大醇・順天府大興の人賞錯らである。

五 涼州感通塔碑の発見

さて、張澍はその「書天祐民安碑後」（『隴右金石録』卷四所引）に次のように記している。

此の碑は吾が武威城內北隅の清應寺中にあり、碑亭を持ち、前後は磚で積み重ねられて久しく密閉されていた。土地の年寄りもまた何の碑であるか知らなかったが、ただ開いてはいけない、開けば必ず風や雹の災害があるといっていた。私は嘉慶甲子（一八〇四）年に貴州の玉屏から病氣を理由に帰郷していて時間があっていたので、友人と見物に出かけ、その密封を取り除こうとしたが、坊さんがいけないと止める。無理強いしたが、あくまでだめという。そこで、「もしも禍やたたりがあつたら、私達が引き受けます。住持には関わりないことです」と言うと、やっと承知した。そこで労働者数人を雇って、前の敷き瓦を開けると碑が現れた。（中略）此の碑は私が開いてから初めてこの世で見られるようになったのである。金石家はまた一種のめずらしい文字を増したのである。

ところで、感通塔碑の発見については、前述した嚴可均著『鉄橋漫稿』に劉師陸が発見したとの誤った記載がある。（『西夏皆慶寺感通塔碑跋』参照「国立北平圖書館

館刊」四卷三号二八頁）劉師陸は嘉慶二十五（一八二〇）年の進士なのだが、嚴可均の誤解は、おそらくは初高齢の『吉金所見錄』（道光七（一八二七）年刊）によるものと思われる。『吉金所見錄』は前述した洪遵の『泉志』の記載されたドヴェリアの論考で有名な図であるが、その中に劉師陸の著述を引いて、西夏文字についての興味深い記述がある。

涼州の土の^{もの}地を掘りて、古錢^{いくつ}数の甕^かを得たり。其の中は開元（唐の開元通宝）最も多く、北宋・遼錢及び西夏の元徳、天盛、乾祐、天慶、皇建、光定の諸品も亦復^{またまた}少なからず。而して、此の種の梵字錢も、亦た数品有り、余共^{われら}千余枚を揀^{えら}び得たり。又嘗て涼州大雲寺に古碑を訪い得たるに、碑の陽面は正に此等の字に作れり。碑陰の楷書、之を捫^{また}り読めば、則ち天祐民安五年に立つる所にして、乃ち此の錢の西夏梵書なるを知る。景嚴（洪遵の字）の泉志を作る時は即ち之を識^しらず。数百年の後、此の疑がわしき寶^{すゐ}を破るは亦た快事^{こころごと}なり。

劉師陸はおそらく張澍が世に出したあとの感通塔碑を訪ねて、こう記したのであろうが、嚴可均がこの一文から感通塔碑の発見を劉師陸の所為と見たのもむべなるかなの感がある。

ところで、張澍は感通塔碑は清応寺にあったとするが、劉師陸は大雲寺としている点については後述する。

六 西夏文字の再発見者

而して、感通塔碑の碑陽に非漢字文で記された番字を西夏文字として再発見したのはだれなのだろうか。一般的に言えば、ドヴェリアということになるのであるが、すでに述べたごとく、一八二七年に『吉金所見錄』で初尚齡は劉師陸が感通塔碑から「此の錢の西夏梵書なるを知」つたと述べている。ドヴェリアより数十年前である。その前に、感通塔碑の発見者張澍は、自らが発見した碑を西夏文字資料として認識したのかどうか。張澍は「めずらしい文字を増した」と述べているのみであるから、嚴密に言えば西夏文字の再発見者とは言い難い。しかしながら、未見の著述で感通塔

碑を西夏文字資料と言及している可能性は十分にある。

洪遵の『泉志』や感通塔碑に注目して西夏文字を再発見した考証学者はいったいだれなのか。張澍か。初尚齡なのか。劉師陸か。それとも、後述の劉燕庭喜海なのか。あるいは、翁樹培か。

ところで、清代には地方史編纂が地方官の分担とされたのだが、このため趣味と実益をかねて銘文の拓本と古銭の収集が文人官僚に盛んに行われた。これが、先述した金石学の一分野となった。また、清代の金石学者は、学史的研究として先学の業績をも取り上げた。その先学の中に、西夏と同時代の金石学者であり、ドヴェリアの論考で有名となった南宋の学者洪遵（一一二〇～一二七四）がいる。洪遵については、張端木（字は崑喬、一七一〇～一七七四）がその著述『錢録』に載せた紹介文がある。

宋の洪遵『錢志』十五巻を著す。按ずるに遵字は景嚴、鄱陽の人。忠宣公皓の仲子なり。官は同知樞密院に至り、淳熙二年に卒す。おくりな諡は文安、兄の文惠适、弟

の文敏邁と名をひそ齊くし、三洪と称せらる。

ちなみに、父の忠宣公皓とは、十五年間女真族の国金に抑留され、その時の見聞記『松漠紀聞』を著した洪皓（一〇八八～一一五五）にほかならない。また、兄の洪适（一一一七～一一八四）は、宋史雜記についての詩文集『盤洲文集』を著し、弟の洪邁（一一二二～一二〇二）は、『容齋隨筆』や『夷堅志』の著者である。『容齋隨筆』には、党項羌酋李定の神臂弓などについての記載があり、『夷堅志』は、有名な「契丹誦詩」の項が載っている。洪氏一族の同時代資料は、契丹・西夏・女真諸民族の研究には欠かせない基礎資料である。

ただ、洪遵の『泉志』には、西夏の古銭は梵字銭と有るのみで、感通塔碑などの西夏資料と併せなければ、西夏文字とは比定できない。

では、洪遵の『泉志』にある梵字銭を西夏銭とした最初の考証学者はだれなのか。これについては、李佐賢（字は竹朋、一八〇七～一八七六）著『古泉匯』の利集巻十五の記述を見よう。李佐賢は洪遵の『泉志』（張海

鵬の学津討原本に依る）の梵字錢について、初尚齡の『古金所見録』で補いながら、分析検討している。まず不鮮明ながら、大安宝錢の表裏と天慶宝錢、乾祐宝錢らしき図を縦に並べて論じている。

洪志梵字錢弁すべからず。大抵屋駄吐番錢に類す。此の錢今見る所の者は尚お三品に止まらず。皆な識る可からず。【初尚齡の】『古金録』劉青園（劉師陸）に拠りて曰く「涼州より古錢數甕出土す。其の中の唐宋遼錢及び西夏の元徳・天盛・乾祐・天慶・皇建・光定諸品皆有り。而して此種梵字錢亦右數品有り。又た嘗て涼州大雲寺に古碑を訪い得たるに、碑陽は正に此等の字に作れり。碑陰は楷書（之を捫り読めば）則ち天祐民安五年（立つる所にして）乃ち此の錢の西夏梵書なることを知ると。劉燕庭曰く曾て藏てる所の西夏天祐民安碑の字を以て之を証するに筆法異らず。其れ西夏錢と為すに疑い無し。天祐民安の紀元を按ずるに尚お元徳以前に在れば則ち此の錢は当に西夏開國時の物にして尚お中華文字通ぜず。後に迺り改めて漢字を用い始

めて元徳以下の諸品有るなり。

この記述からは、梵字錢の文字を感通塔碑銘によって西夏文字としたのがだれであるかは、やはり不明である。つまり、初尚齡、劉青園（＝劉師陸）、劉燕庭（＝劉喜海）の三名は以上の文に拠るかぎり、皆その可能性がある。

ところで、劉燕庭とは如何なる人物なのか。劉喜海、字は燕庭。『東海金石苑』の撰者である。『東海金石苑』は朝鮮金石文資料として有名で、長年日本語と朝鮮語の比較言語学的研究を続けてきた老生には、なじみ深い文献である。鮑康子年（一八一〇～一八八〇）の『觀古閣泉説』の記述より、劉燕庭を紹介したい。

泉幣之好は山左に萃る。時を同じくして初渭園（尚齡）・劉燕庭（喜海）・呉子苾（式芬）・陳寿卿（介祺）・李竹朋（佐賢）の如き一時の盛りを極めり。当に燕庭を以て最と為すべし。

さらに、同書には「竹朋、余に書を致して云う」として、以下のように述べている。

近代の收藏家にして百年を過ぎざる者、儀徴の阮氏（元）・大興の翁氏（樹培）・漢陽の葉氏（志詵）・洪洞の劉氏（師陸）・諸城の劉氏（喜海）ら没りて僅かに数年にして、諸物星のごとく散りはつ。人の間の感慨いに勝えず。

また、鮑康子年の『統叢稿』の「劉氏長安獲古編序」にも劉燕庭についての記述がある。なお、この「劉氏長安獲古編序」には、割注があつて、「辛丑の年（二八四一）の原序にして前編に載す所、乃て壬申の年（二八七二）の補刻の時後序とす」とある。この割注は架蔵の湫漻齋叢書本にはない。

当代の賞い鑑る家と称えらるる者として、余は二公と交わるを獲たり。一は姻丈（妻の父）劉青園觀察、一は燕庭先生なり。先生は文正（劉統勲、字は延清一六九八

（一七七三）・文清（劉墉、字は崇如、号は石菴一七一九）一八〇四）公の孫、文恭（劉鏞之、公の子為り。韋平の閥（漢書にある韋賢・韋玄成と平当・平晏父子が宰相の職を継承した故事による）なるに、室に長物無く、惟だ手ずから金石文字を拵めて五千通の多きを逾ゆ。官に服むること中外に廿餘載なるに一錢すら名づけず。（史記卷百二十五鄧通伝の故事）而して篋中の錢幣尊彝之を載すに車一輛兼す。（後漢書卷六十二呉祐伝の故事）繁富にして、単には究む可くも莫く、蓋し博古の君子なり。先の覺生世父は文清の門に出ず。文恭は先大夫の知貢挙と為り先生を師き、復た先子堅兄と同じく秋榜に登れり。余、神交有るも一見ゆるを獲ざるを恨めり。

こうした記載から、劉師陸と劉燕庭が著名な古錢収集家であったことがわかるのだが、西夏錢研究から西夏文字の再発見に至った可能性は、同じく古錢収集家であった翁樹培にも云いえる。

翁樹培宜泉は『古泉彙考』八卷の著者である。翁方綱（一七三三～一八一八）の子息で、乾隆五十二（一七八

七) 年の進士であつた。先の李佐賢は『古泉匯』首集卷三に、翁樹培についてこう述べている。

庶常官由り刑部員外に至る。専ら古泉を愛して数十年を積みて倦ず。

翁樹培と同年の進士に初尚齡の兄弟初喬齡がいる。喬齡の兄彭齡は字を紹祖、号を頤園といい、乾隆四十五(一七八〇)年の進士である。張澍の伝記にあるように、張澍と初彭齡は面識があつた。先に述べたように、明清の中国では同じ年に進士となれば、親戚同様のつきあいをする。官吏となれば郷里から離れる建前のあつた清代では、同年進士のグループが帰属すべき朋党となる。近世中国では帰属意識は、行動規範において、かなり大きな部分を占めていた。翁家と初一族は交友関係が当然あつたであらうし、翁樹培が張澍と知友であつた可能性はかなり大きい。張澍の発見した感通塔碑について、翁樹培の論考が西夏錢とも絡めて有るのではないかと考え、文献をあたっているのだが、今の

ところ未見である。

翁方綱については、夏詒妙法蓮華經とも関係があり、もし続稿を書く機会があれば、もう少し詳しく述べたい。西夏文字の再発見について、翁一族と初一族に興味が集まっているのだが、これという決め手になる文献が未だ見つからず、清代考証学者の著述を目下渉獵中である。

七 感通塔碑文の内容

この感通塔碑に刻された内容であるが、主になるのは造塔の由来である。漢文碑銘の二行目から三行目がこれにあたる。

(前文欠落) 八万四千宝塔を建て、舍利を奉安して、仏恩の重きに報いたが、今武威郡の塔は即ち其の数にかぞうなり。周より晋に至るまで千有余歳、中間の興廢は經典の記す莫し。張軌称制(中略)時に人有りて、天錫に謂いて曰く、「昔阿育王仏舍利を奉じて塔を遍く世界中に起こせり、今の宮は乃ち塔の故基の一なり。」

と。天錫遂に其の宮を捨てて【寺】を為る。

同じ内容の文が、西夏文碑の六行から七行にある。

以下、日本文にして記載する。

涼州の浮図（塔）なる物は阿育王の舍利を分かちて「出来」、天上天下八万四千の舍利を藏る處、（中略）張軌の天子と為りし時、彼の上に宮殿を為れるが「將來」其の涼州武威郡の名是（なり）。張軌の孫張天錫王座を受くるや「出来」、則ち宮殿を捨てて「出来」、精巧なる匠人を招き寄せ「過來」七層の浮図を為れり「將來」。

《注》西夏文の——中の訓みは、西夏語の方向を表す前置の助動詞の訓みである。現在でも河西回廊の少数民族の言語に見られるとの孫宏開氏の論考がある。近代漢語になってあらわれるが、日本語にも分限漢語にも存在しないきわめて特徴的な語法といえよう。例えば最初の「出来」は、分けるという動詞の空間的時間

的心理的な移動の方向性を表す西夏文字を「訓んだ」ものである。詳しくは小稿「西夏語と近代漢語の成立について——包括・排除の代名詞と方向を表す助動詞——」（長田夏樹論述集（上）二〇〇〇年六月）を参照されたい。

この造塔由來記は、あきらかに二つの説話から構成されている。阿育王説話と張天錫説話である。阿育王が八万四千の塔を造った説話については、求那跋陀羅 *Guna-bhadra* (三九四～四三二) 訳『雜阿含』卷二十三（大正藏卷二、p.165a）；西晋の安法欽訳『阿育王伝』（大正藏卷五十、p.101c-102b）；魏収（五〇七～五七二）『魏書・釈老志』などから引いたものである。いずれにしても、仏教王国たる西夏では「アシヨカ王説話」はかなり一般に流布していたと思われる。

もう一つの前涼（三一三～三七六）張氏政權が自ら建てた宮殿を喜捨して塔寺を造る説話については、もう少し複雑になる。五胡十六国の時代に姑藏とよばれた涼州に都をおいた前涼は、異民族の圍繞に孤立する漢

族の王権であった。そのため、鎮護国家の役割を担う
仏教が尊崇の的となった。『魏書釈老志』は、当時の涼
州のありさまをこう伝えている。

涼州は張軌より後、世々仏教を信ぜり。敦煌の地は
西域に接なり、道俗交も其の旧き式りを得て、村塢相
い属なりて、多く塔寺有り。

『釈老志』には涼州出身の高僧が多かったことを記
しているが、出家して慧達となった劉薩河に関する説
話が張天錫説話と関連する。慧達については、慧皎（四
九七～五五四）撰『高僧伝』巻十三（大正蔵卷五十、p.406）
；道宣（五九六・六六七）撰『続高僧伝』巻二十五（大正
蔵卷五十、p.664）に詳しい。

造塔由来記に続くのは、仏教の徳を讃える文である。
西夏文のこの部分は詩的で、西夏文学の質の高さを九
百年の時を越えて伝えている。西夏文十九行から二十
行の部分を読んでみよう。

五色の瑞き雲は
朝な朝な覆ひくだりて金の光り飛び

三世の諸の仏は

夜な夜な繞りきたり聖き灯び現る

一劫一たび完れば

先づ地の道を獲れ心歡び踊り

七覚悉に察れば

福智の人を得て仏の宮に至らん

天が下の黒き頭は

苦楽二つの福を捜す処

陸の上の赤き面は

勢敗双つの根基はれなり

五色瑞雲 朝朝 下来 覆金光飛

三世諸仏 夜夜 一来 繞聖灯現

一劫一完 先地道獲心歡踊

七覚悉察 福智人得仏宮到

天下頭黒 苦楽二之福搜処

陸上面赤 勢敗双之根基是

見事に対偶のととのった駢儷体風の四七言詩で、動
的で色彩豊かな名文である。あるいは、ご詠歌のよう
に、詠いながら信仰告白を行ったものであろうか。

ところで、この四七言詩中の「天下頭黒・陸上面赤」
については、ネフスキーが提示した民族学上の問題が
存するので、詳述したい。まず、「頭黒」と「面赤」と
いう表記法であるが、同じ表記法として、「竜青」「雀
赤」「虎白」という西夏語文があげられる。これは四方
に配した四霊、青竜066-2・朱雀066-3・白虎071-1の云
いである。附した数字は、西田龍雄氏「番漢合時掌中
珠解説」(『西夏語の研究』1、一九六四年六月)中の語彙
番号に基づいて李範文氏が補綴した「掌中珠注音釈読」
(『宋代西北方音』一九九四年六月)に依った。

さて、ネフスキーの「黒頭・赤面」論であるが、ま
ずは彼の訳語にあたってみよう。‘Onaimenovanij

Tanguskogo gosudarstva”の“Tangutskaja Filologija”
一九三三『西夏語文学』一九六〇所収 唐叔豫漢訳「関
於西夏国名」(初掲は『国立北平図書館刊』九卷二号、一九三
五)にその訳語がある。ネフスキーは chernogolovye
krasnolice 「黒き頭のものたち、赤き面のものたち」
と訳している。結論から言えば、ネフスキーは「黒
頭・赤面」とはタングート民族全体を表す語彙と考え
ていた。というのも、「黒頭」「赤面」は対をなす語句
として、西夏の詩文にたびたび出てくるからである。
ネフスキーの指摘を見よう。まずは、西夏の「大詩」
から。

皇天下 千頭黒 福低高

陸地上 万面赤 智不斉

つぎに、「夏聖根讃歌」冒頭から。

頭黒石城漠水辺

面赤父塚白河上

河西長之國在彼

このように、西夏の詩文を挙げたあと、ネフスキーは次のように述べている。

私は個人的には「頭黒」「面赤」という語はタングート民族総体を現す同義語の表現で使用されているとみなす方へ傾いている。

これに対して、ロシア科学アカデミー東方学研究所の西夏学専門家エヴゲニイ・イワノヴィチ・クチャノフ氏 (Evgenij Ivanovich Kychanov) (漢字表記では克恰諾夫) は、「党項格言の性格と芸術的特質に関する問題について」(『新集錦合諺語』一九七四) でネフスキー説を跡付けている。また、クチャノフ氏は一八九三年に、さらにこの説に民族学的な解釈を加えている。(国立エルミタージュ美術館長ミハイル・ピオトロフスキー Mikhail Piotrovskij 編集の『シルクロードの失われた帝国——ハラホトからの仏教美術』参照) 以下に引用しておこう。

タングートテキストはしばしばタングート族に対し

て黒い髪をしたもの(頭黒)と赤い顔をしたもの(面赤)として言及する。この記述はまた、かなりの学問的な注意を喚起させる。これについては二つの本来のタングート族——天空出自の父系の黒髪族と大地出自の母系の赤顔族——であるとするよりほかの良い説明をすることは難しいであろう。

この「黒頭・赤面」問題には、西田龍雄氏も一九六七年に紀伊國屋新書の一冊として刊行された『西夏文字』の中で触れている。さらに、西田氏は「西夏語『月々樂詩』の研究」(『京都大学文学部研究紀要』第二十五、一九八六)の中で西夏詩の中の対句に関する興味深い指摘を行っている。ちなみに、「月々樂詩」をネフスキーは「月月娛詩」と訳している。この詩の西夏語オリジナルは、対句表現が豊富に含まれており、これを分析した西田氏は、同じ内容の詩句をⅠ難しい単語・表現とⅡ易しい単語・表現の対句からなることを説明している。そして、Ⅰは「黒頭」(遊牧民)の言葉、Ⅱは「赤面」(農耕民)の言葉に該当するのではないかと推測

している。ここでは詳密な論証は行わないが、依るべき説であろう。なお、前述の陳炳応氏も「西夏の詩歌諺語に反映した社会歴史問題」(『甘肅師大学報』一九八〇・二)で「黒頭・赤面」問題を論じている。

こうした論説を参照して、前掲の西夏「大詩」を訳解しておこう。

皇天しろしめす下に 千の黒き頭たちの

福いは高低あり

陸地うしはく上に 万の赤き面たちの 智斉から不

八 清応禪寺と涼州大雲寺の塔

では、一〇九四年に感通塔碑の建てられた寺の名称は何といったのだろうか。発見者張澍は前述のように清応寺としている。ところで、張澍は「樸学高才」の一人として、拓本の収集にも情熱を傾けた。『涼州府志備考』には、おびただしい量の碑記が紹介されている。清応寺関係のものとしても、この感通塔碑以外に三種類の碑文を紹介している。時代の古い順にあげてみよ

う。

万歴十六戊子(一五八八)年建立の「勅賜清応禪寺碑記」、康熙十一壬子(一六七二)年建立の「重修清応寺塔記」と康熙五十辛卯(一七一)年建立の「重修清応寺塔頂碑記」である。この三種の碑文の内容を検討して、感通塔碑が建立された寺が本当に清応寺であったのかを考察してみたい。

まず、戊子碑である。

稽古の仏氏曰く、西方の聖人とは蓋し沙門の涅槃莊嚴にして菩提の正果を成就したる者なり。其の我が中国に入れるは則ち漢の明帝に於て始まり、梁の武帝に於て甚しく、而して隋唐之に次ぐ。故に天下後世哄然とし中国の仏其人也。涼州は西域の襟衽之地に而て番の僧其の間に雜ざり出ず。其の城之東北隅に、旧く北斗宮の遺址有り。相い伝えて始めて至正の時に至りて、兵火に残燹す。永樂の間に勅して清応禪寺と為す。殿宇は巍く峨くして廊の楹は絵こと絢かに世々古ある刹と称く、今に迄まで二百有余祀陽に雨に暄き湿りて瓦

こわ
毀れ棟橈^{たわ}み像^み貌^お傾^{かた}き類^{くず}殊^{こと}に隆^{さかん}に具^{そな}えて瞻^{あおきみ}る所以^{ゆゑ}に非^{あら}ざるなり。

次に壬子碑の銘文をあげる。

清応寺は本と北斗宮と名づく、北斗宮の姑洗塔有るは、蓋し晋の張重華宮内の地を^{すて}舎て寺を建て塔を立つるに始まる。今ま此の塔と大雲寺の塔は並び峙^{そばだ}ちて水口を鎮^{しず}め塞^{ふさ}ぎて穹^{おほぞら}を摩^かぜ日^ひを燦^{さん}け光^{あかり}り耀^{やう}くこと常ならず。蓋し涼州の一つの勝^{うつく}しき概^けなり。

最後に辛卯碑の銘文である。

蓋し聞く寺とは乃ち仏の舎^{すまい}也と、瓊^{あでや}かなる宮・瑤^{めずら}なる室^{へや}に非ずして、以て其の美しきを形どるに足らず。塔は本と仏の身^{なまみ}也と、雲に逼^{おほぞら}り霄^{おか}を干さずして以て其の高きを仰^{たの}ぐに足らず。世の寺を修^{しゆ}え塔を建^たつるは止^たに妙なる像^{みかた}を崇^{たか}び掲^かぐるのみ非^{なら}ず、人を使^ひて廟^{みや}に入りては思い敬い像を見ては皈^き依^えせしめるは良^{よし}に以^{もつ}有る也。

この三碑にある北斗宮ないしは宮が、壬子碑の謂うように、感通塔碑にある張軌の建立した宮であるかどうかは判然としない。ちなみに北斗宮とは道教的司命神北斗星君を祭った施設である。道教は中国古来の民間信仰が仏教の影響下に体系化して成立した。思想的にも信仰集団としても、仏教の思想や教団組織を踏襲したのである。しかしながら、それ故にこそ道教成立当初の漢代から、仏教と道教は複雑な対立関係にあった。北斗宮を寺に変える思想的背景にはさまざまな問題を内包するが、ここでは西夏と直接関係しない問題であるので、詳しくは触れない。

明らかなことは、壬子碑の建った一六七二年には、清応禪寺の塔は涼州衛の古刹大雲寺の塔と並び立っていたことである。この大雲寺なる寺は、唐代高宗の麟徳三（六六六）年に諸州に建設された官寺の一つであった。我が邦奈良朝の国分寺はこの官寺制を他の諸々の制度とともに取り入れたものである。

ところで、この諸州の官寺がごとく大雲寺という名称になったのは、かの名高き則天武后が即位した

天授元（六九〇）年のことである。女性である武則天が皇帝に就く正当性を主張するため、武后の側近の僧たちは『大方等無想大雲經』なる經典を提示した。この經典中には弥勒下生説話と浄光天女即位説話が記載されていて、衆生を済度すべく浄光天女たる武后が即位するという理論は武周革命の礎石たり得た。『大方等無想大雲經』は単に『大雲經』と呼ばれ、武則天の国周を支えた。それ故、諸州の官寺は大雲寺と呼ばれることになったのである。

涼州大雲寺の碑銘は、清応禪寺の碑銘よりはるかに見つけやすい。古いものとしては唐の景雲二（七一）年建立の「涼州衛大雲寺古刹功德碑」（『全唐文』卷二百七十八）があり、新しいものとしては明の天啓二年壬戌（一六二二）年の「増修大雲寺碑記」がある。まず、景雲碑を紹介しよう。

夫れ無為なる者は、静かに而して常に楽しみ、応物なる者は成^なげて而して有らざるは是れ冥権を知りて瀾倫^{らんりん}を待^たまず。大悲は方便を主とす可^{むね}し。三界の中に四

生を汲引し、弘く八政を宣^{おおよけ}にし、八万四千に非ざれば以て其の沙門の路を開く無く、三十七品は其れ浄土の衢^{ちまた}を弘む者也。大雲寺なる者は晋の涼州牧張天錫の昇平之年に置く所なり。本は宏藏寺と名づけ、後に改めて大雲と為す。則天大聖皇后朝に臨める日なるに因りて諸州創め各々に大雲を置き遂に号を改めて天賜と為す。其の地は四郡の境に接^{まじわ}り、三辺の衝要を控え蒼松を俯^{みおろ}し而城を環^{とりか}こみ、白蘭を珍^め而鎮^{しずめ}と作せり。

次に天啓碑である。

涼州大雲古刹紀、其の顛末は唐宋二碑有りて彷彿^{ほのかなが}ら考えらる可^べし。元末の兵燹以後、重ねて鼎^{なべ}に新^{あらた}しく爰^{こゝ}に古蹟を復せり。皇明の洪武十六年自^{みづか}り始まる。其の募主は則ち日本の沙門志満なるも未だ紀^{かきとむ}る者有らず。旧く浮図五級有るも、未だ尖を合すに及ばず、万歴壬辰の歳に至り本城副將魯光祖磚瓦を施^{つみあ}し砌^{せき}げ補^{おぎな}ないて前の功^{いさ}を完^とく。隆嵒^{たかぐさび}ゆること百八十尺、清応寺の塔と双峰^{そうほう}天を插^さして、五涼の一奇観と称すと云う。是より

後時和み歳稔り、民庶く兵彊し。遂に松疆数千里を恢復し而虜運日に衰え兵威日に振う。氣数の然ら使むるところと雖も法力の助佑くる所に非ずと謂う可からざる也。

こうして並べてみると、大雲寺天啓碑は清応禪寺戊子碑を参照して刻銘し、清応禪寺壬子碑は大雲寺天啓碑を意識して記銘したことは明かであろう。近接した両寺は、元代至正年間に兵火で焼け、明代に再建するという同じような史的展開を辿っている。同じく涼州に華麗な塔を以て並ぶ大雲寺と清応禪寺は、涼州から遠く離れた者には識別しにくかったのではなからうか。そこに、大雲寺と清応禪寺を混同する誤謬を生じたのであろう。むしろ、西夏文の刻された感通塔碑は清応禪寺にあったもので、大雲寺にあったものではない。ところで、今から八十二年前の大正十三（一九二四）年に涼州大雲寺に天啓碑の拓本を取りに行った日本人がいた。副島次郎という佐賀生まれの青年である。副島は『アジアを跨ぐ』という紀行文を残している。副島

の旅行は、アジアとヨーロッパを結ぶ内陸鉄道を帝国日本が建設すべきだという持論の検証のためのものであった。新聞記者の副島は、この冒険旅行の経費を多方面から集めたようだ。その中に段祺瑞の軍事顧問だった大谷猛や北京公使館付き武官であった金子定一がいたらしい。

一月一日到北京を發つた副島は三月十九日に涼州にたどり着く。翌二十日に副島は大谷に依頼された拓本を摺るために大雲寺に出かける。大雲寺は百八十尺の塔を持つ堂々たる大寺であったが、荒廃していた。近くに同じ塔を持つ姉妹寺があったと書いているが、これが清応禪寺のことであろう。副島の目にも、「姉妹寺」と映るほどに、大雲寺と清応禪寺は似ていたのである。

九 終わりに

副島次郎が河西回廊を旅したのは、老生が内蒙古で暮らす二十年ほど以前のことである。そういう意味で、『アジアを跨ぐ』を懐かしく読んだ。第二次大戦や中国革命、さらに文化大革命が起こり、また、最近の経済

発展。数十年の激動を思う時、うたた今昔の感にたえない。

老生の学も「日本語はどこから来たのか」と云う国学的関心を出発点に、欧米の比較言語学の手法と苦闘し、中国音韻学を学ぶ必要性から清の考証学に辿り着くこととはなった。今時、清の考証学や金石学は博物館で鑑賞すべき学問かも知れぬが、考証学者の真摯な姿勢や並々ならぬ努力への共感もあつて、老生なりに行けるかぎり清代考証学者の業績を跡付けてみたいと考えている。これが白鳥の歌にならぬことを祈りつつ、今回はひとまずここで筆を擱く。さらなるネクストワンを構想する今日この頃である。

(おさだ なつき／神戸市外国語大学名誉教授)